

文芸特集

たくさん作品の中から選ばれた秀作の一部を紹介します。限られた字数の中に織り込まれたさまざまな思いや季節の情緒を味わってみてください。

一席

高齢者の人気集めるヘルパーが首にかけいる異国のネーム

上青木 3 岩崎モト子

評 介護は人手不足の最たる職種の一つ。もうすでに介護をうけている高齢者に馴染んですっかり人気を得ているヘルパー。ひよつと首に下げていいるネームをみると異国の名がしるされている。

これという病もあわず七十八近ごろゴザの縁につまずく

領家 3 森岡 賢吉

ラスコーの壁画は二万年前ブルトニウムは十万年生く

川口 1 川久保良治

はたちの頃友がくれたるタンブラー今なお使うに彼女はおらぬ

東本郷 石川能志子

ためらえる項目もあり記しゆく介護保険の更新手続き

道合 神谷安久子

現役の匂いの残るワイシャツを身に付け畑に大根をまく

安行原 山田 英一

捨つべきか捨てざるべきか迷いおり黄泉にゆきたる友の文末

宮町 田中 澄子

ダンボールも遊具となりし春の土手滑り転がりまた駈け上がる

安行吉岡 會澤 光子

ひとことを言えたらきつとすつきりす言いたる君を思うと言えない

本町 4 田邊 元子

ふるりの林檎の花に似ていると紅の海棠父母に供える

三ツ和 1 山口 元幸

ひさびさにマスクをはずし声かわす頬もゆるみて風温む朝

差間 中田 道子

名が体を表わさぬもの数多ありセブンイレブン我が名も然り

峯 龜山 幸輝

曇天に雪だるま並ぶ天気予報急ぎ買物坂くだりゆく

鳩ヶ谷本町 4 町田 君子

風呂掃除なぜか生まれる短歌の数無心の自分がそこにいらし

芝下 2 中山千枝子

戦前の村もその後の町並みも見おろして来し門前の松

安行原 高橋 清

悪夢から七十四年過ぎ去りて鑄物の街も中核市へ

安行慈林 吉川 正孝

いつの間に大きな太い大根がしなびたたくわんになつた我が脚

朝日 3 高松 幸江

梅開きこぶしが咲けば次さくら今年はどここの桜を見るか

芝高木 2 森田富美子

俳句

一席

磔刑にしては歓声吊鯨鱈

鳩ヶ谷本町 2 市川 和夫

評 鯨鱈は、ぬめりがあり、まな板ではなくかぎに吊るしてさばくのだが、それを作者は磔刑(はりつけ)の刑と見立て、料理人の見事な包丁さばきに対して周囲の者の、賞賛や驚きを歓声と捉えたのである。

肩肘をはらぬ姿や一輪草

上青木 1 鈴木 千鶴

路のたう出たよと土の声を聞く

小谷場 宗像とき子

隙間風忍び寄りたる有頂天

西川口 3 早乙女文子

目も鼻も口も自前や春の風

赤井 4 倉川 和子

蜜柑もぐ海の夕陽に染まりつつ

西青木 4 青柳 裕美

一尾の鯉に乱るる花筏

石神 徳丸美也子

彼岸会や僧の赤子の泣き声す

南鳩ヶ谷 1 岡野 安代

ひなげしのわずかにゆるる風の径

領家 2 福島きよの

五十肩軽くなあれと初桜

領家 3 中川 美穂

祝福と涙をまとい嫁ぐ春

飯塚 3 鈴木日出男

春雨のノックでひらく岩のヒバ

里 中村ノブ子

啓蟄や生きる命の始発点

芝 1 引間 徳平

しだれ梅花の名問へばふじぼたん

並木元町 1 井上 洋子

福寿草次女に宿りし命ふたつ

新堀 小澤富美子

一席

元号が変わり新たな羅針盤

上青木西 4 星野 良一

評 庶民の素朴な一行詩に秘めた雑感。余白に酌める昭和と平成のもたらした進化の中に、少子高齢化と人口減少の史実は否定出来ない。挽回の施策が「令和」の課題だ。

自叙伝の行間に伏す青いペン

鳩ヶ谷本町 3 加藤 レイ

明日へと向かう一番若い今日

飯塚 2 川瀬伊津子

落第と言う学歴を活かす人

東川口 2 星野 直康

独り居に幾多の愛の一つなり

元郷 2 田口 公江

舟戸原進めば校歌口を出る

上青木 4 星野 明美

お金より大事な夫の介護力

安行領家 原澤かね子

今宵また百葉の長飲める幸

安行領根岸 堀口 弘一

安らぎをくれる五坪の縄のれん

東本郷 土屋 弘子

モノクロの時に浮かべる孫の顔

安行領根岸 宮崎 忠久

白髪染めしないと決めて紅を引く

幸町 1 保坂 治代

短歌

金子富美子 選

川柳

新井 愁思 選

白髪染めしないと決めて紅を引く
モノクロの時に浮かべる孫の顔
安らぎをくれる五坪の縄のれん
今宵また百葉の長飲める幸
お金より大事な夫の介護力
舟戸原進めば校歌口を出る
独り居に幾多の愛の一つなり
落第と言う学歴を活かす人
明日へと向かう一番若い今日
自叙伝の行間に伏す青いペン